

東アジア研究——誰にとつて？ 誰のための？

村田雄二郎

「憲法上の権利の擁護においても、アメリカの支配力の犠牲になっている罪のない人々に手をさし伸べることに
おいても、理解と合理的な分析に依拠することにおいて
も、『われわれ』にはまだまだずつとよい仕事ができるは
ずだ」

「ひとりのバレスチナ人として」わたしたちは、貧困、無知、
文盲、抑圧がわたしたちの社会にはびこるようになった
ことに対する自分たちの責任について考えはじめなけれ
ばならない」(E・W・サイド『戦争とプロパガンダ』中野真紀
子ほか訳、みすず書房、二〇〇二年、三三三―三四頁)

タイトルの問いかけ自体が論点先取で、あらかじめ問いの
方向を規定していることは、当日の冒頭の主旨説明に当たり、
司会役の尾崎文昭氏が、正直に表明していたとおりだ。「必要
あるか」と聞かれて、即座に「必要ない」と言いきるだけの
蛮勇や策略など、誰も持ち合わせないだろうし、やはり問い
の設定自体「必要だ」という回答を暗に求めているわけだか
ら、問い方の善し悪しを措けば、議論の方向は自ずと定まる
にちがいない。

「二十一世紀」という西洋的な時間分割法や「東アジア」な

る地域／文明概念、それに「日本」という主体の立て方、等々、
いずれも問題含みであることは言うまでもない。それぞれが、
大いに議論する価値のある話題であるし、現にあちこちで議
論されているから、へたに屋上屋を架すまでもあるまい。

とはいえ、編集部からシンポジウムの感想を何か書けとの
求めでもあるので、以下、論点をややずらすことになるかも
しれないが、当日あまり議論されなかったと思われる「日本」
にからんだ感想を綴ることにしよう。

まず、「東アジア研究は誰にとつて必要か？」という問い
を立ててみる。答えは、一見単純である。すなわち、国民、
あるいは納税者にとつて、である。当日の議論では、大学改
革をめぐる昨今の情勢を反映して、大学や研究機関(国から
の助成を受けている非国立も含む)の外部に対する説明責任
が、例になく強調され、どちらかといえば守りの姿勢が目立っ
たように思う。人文系学問(Humanities)の「実用」や「社
会貢献」がどこまで可能か、もつと直截に言えば、研究・教
育を支える予算措置を確保するに足る申し開きができるのか、
できるとすればいかにして、という状況対応的な問いかけが、
そこにはあった。

たしかに、ますます劣化する時間の犠牲を払いつつ、そう
した問いかけの緊急性や切実さを、筆者は充分に共有してい
るつもりである。むしろこれまでそうした危機意識が薄弱す
ぎたのが、昨今の大学「改革」推進の底流にはあるのだとも
感じる。「象牙の塔」の古びたイメージは、自ら払拭しなけれ
ばならない。大学が特定の社会の中にある以上、価値中立・

価値自由を教育研究の原則とするとはいえ、一定の媒介を経た社会との関係付けが求められるのは、理の必然である。

けれども、学「虚」と「実」という古典的論題(?)はさておき、大学という場が、現実の国境線ほどに内外の境界線を引きにくくなっている現在(例えば、国立大学で教える「外国人」の数を想起せよ)、「誰に対して」あるいは「誰にとつて」という問いかけは、そう自明であるわけではない。大学で営まれる研究の成果が、一義的に国家に還元されるものではないとしても、では、社会というのはどの拡がりをするのか。産業界、教育界、政官界から、地域共同体、国際／民衆社会、ひいては人類、地球、といろいろな水準があり得るだろう。

アジア研究の場合、各種「社会」とのつながりやそれとの関わりは、希薄であるどころか、充分すぎるほどに強くあるはずだ。また、アジアをめぐる言説は、固い込まれたマイナーな市場だけで流通する商品では、もはやない。その気になりさえすれば、また、課題提示の仕方によつては、おおいに各種「社会」に売り込むことだってできる。人文系学問に対する逆風が、昔に比べて強まっているとも、筆者には思われなない。そもそも無風状態でなされる学問などないし、あつてはならないだろう。ひよつとしたら、アジア研究には一陣の新風が吹いているのではないか。それにもかかわらず、そうした状況と切り結ぶことのできない学問研究であれば、税金を使つてまで維持するに及ばないというだけの話である。

もちろん、こういったからといって、個々の研究成果がパツ

ケージ化された商品として売り出されればいいと考えているわけではない。そもそも、誰のためにという問いへの答えは、多種多様でありうるし、またそれが望ましいだろう。研究の課題設定や動機付けに利益誘導や政治規制は不要である。

ただ、留意しておきたいのは、大学対(国内)社会という二者関係で、問いは完結しない、ということである。そこには当然のことながら、認識の対象であるアジアとの関係が介在する。大学対社会の関係に加えて、研究の対象であるアジア地域との関係が重要だということである。あるいは、研究主体と客体の関係という古くて新しい問題を問い直すことといえようか。

そこで、筆者の頭に思い浮かぶのは、反省意識を欠いた「エ」的漢学(竹内好)や「中国なき中国学」(溝口雄三)への先人の批判である。そこには、他者抜き日本の自己イメージの空虚な肥大化とアジアへの謂われなき蔑視感がえぐり出される。緊張を欠いた優越／劣等意識が、近代日本のアジア認識ひいては学問体系を墮落させてきたのだ、という自己反省には、今も傾聴すべきものが多く含まれている。

ただ、こうした批判に共感しつつ、他方で違和感を覚えるのは、アジアという他者を欠落させた近代日本の自己意識への批判が、例えば竹内好であれば「民族」の主体性を投企的に構成してゆくような、「戦後」特有の言説のあり方である。端的に言つて、日本批判としてアジアを定位することは、「戦後」のある時期には有効であつたかもしれない。しかし、そうした日本批判としてのアジア学が、「戦後・日本」の未完の

脱植民地化という課題を、かえって視界から遠ざける効果を生んだとは言えまいか。

ちなみに筆者は、竹内のアジア論はこの点で画義的な価値をもつと考えているが、そのことを詳論する余裕はない。一つだけ言えるのは、一九八〇年代までの「戦後・日本」では、アジアを対象にした日本語による創作・研究活動が、必ずしも日本のナショナルイデオロギイと結びつかない、というような事態は、想像の埒外にあった、ということである。竹内の思考を活性化させていたような中国と日本の文化的相異（中国の近代と日本の近代）など、認識主体と対象の緊張ともなった距離感、そうしたものが大きく変わりつつあることは否定できない。言い換えれば、アジアへ向きあい、アジアに身体を開く「日本」という場のありようが、根底から変容しつつあるのだ。

そうした変化の質は、別の角度から言うと、グローバル化と総称される地域の構造変動によって、主体と対象の関係がかつてのように、「見る」―「見られる」という一方的なものではありえなくなつたということである。アジアから日本が見られ、また日本の内部にある「アジア」からアジアが見られる、というように、アジアをめぐるまなざしの乱反射や錯綜が生じている。国家や民族という主体を脱構築し、地域や文化の複数性（ファクターとしては、地方、民衆、階層、生業、ジェンダー、エスニシティなど）を重視する趨勢も、強まっている。

こうした中で、文化研究や地域研究の二つの相対する基本

アプローチも、否応なしに、挑戦を受けることになる。内在理解型アプローチと客観分析型アプローチの二つがそれである。

内在理解型アプローチとは、一言でいえば、限りなく対象地域の文化に潜心し同化していく方法だ。中国を研究するなら、中国人のように感じ、中国人のように考えること。もとより、同化と憧憬の対象は選択的にはたらかざるを得ないから、例えば、古典文芸であつたり、明清の文人生活であつたり、社会主義革命であつたりするが、地域研究で目指される内在的理解―言語の習得、現地での生活経験、参与観察や調査など―も、本質的にこれに近似する。

その対極に位置するのが、第二の客観分析型アプローチである。これは、科学的・客観的な学知の生産を提唱するもので、脱イデオロギー・脱革命を標榜する類の現代中国研究などがこれを代表する。社会科学的方法のほか、統計による数量化や資料批判を事とする歴史学の実証主義も、このアプローチに含まれると考えてよいだろう。外からの視点は、内部にいるものに気がつきにくい「常識」や「慣習」を組上に載せるのに有利だ、との岡目八目―漢語なら「当局者迷、旁観者清」だろう―を積極的に擁護する立場でもある。

外部の視点から見ることと、認識対象との距離を極小化して見ることで、この二つの接近方法を使い分け、あるいはミックスさせながら、実際の研究は展開する。米国流に言えば、「熱い心と冷たい脳（warm heart, cool brain）」を併せもつのが、研究者の理想状態ということになるのだろうが、はてそ

れて充分なのか、というのがシンポジウムを傍聴した後に抱いた、筆者の勝手な感想である。

内在理解にせよ、客観分析にせよ、対象（地域）を本質主義的に定義し、文化や伝統が構成（construct）される側面に自覚的でない、という批判がある。「想像の政治共同体」（B. アンダーソン）や「伝統の発明」（E. ホブズボーム）などの語で含意される近代批判は、その例である。また、地域の設定や定義に関わる次のような理論的批判も、傾聴に値する。

「……『地域』概念の理論的含意は、単にスケールの問題ではなく、それが既存の空間的想像力に引かれているさまざまな境界線——最も強力には国民国家の間の国境線——を、いったん括弧にいれ、それらを横断するような単位を提起することにある。さらにいえば、空間のスケールをどのように測るのか——物理的な距離なのか、モノやヒトが移動するのにかかる時間なのか、情報の流通や情報へのアクセス権の配分のかたちによるのか——という問題にまで展開して考えれば、『地域』という概念自体が、ひとつの理論的契機として自己遂行的に解体し、歴史における空間という問題についての根本的な再考へと至る道の入り口にまで導かれることになる。」（山下範久『リオリエント』が提起するもの、川勝平太編『グローバル・ヒストリ』に向けて、藤原書店、二〇〇二年、九七頁）

急いで、「日本」の問題に戻ろう。敢えて問題を提起すれば、アジア研究の方法に関わる課題として、主体（日本）と客体である国家・民族・地域の関係を問い直すことが肝要である。同時に、日本とアジアの関係を、かくのごとく主客に

割りふることは妥当かという問いも問われ続けなくてはならない。先に指摘した地域の構造変動が、アジア／日本という境界の根拠そのものを問うているのだとすれば、地域概念の洗い直しはもとより、日本という主体もカッコに入れることが求められよう。それも、方法や理論の水準だけではなく、研究の現場で自己遂行的に示されなければならないのである。

だが、「日本」という主体を宙つりにしたままで、他者との関係を問うことができるのだろうか。初めから主体をカッコに入れたコスモポリタンの立場は可能なのか。このあたりに、現在の日本がアジアと向き合う際に生じる問題の焦点が見いだされるようだ。一例を挙げれば、中国国内で「旅日学者」と称される人々にとつて、日本という場で、中国やアジアを対象とした研究を行うことの意味は何であろうか。「日本人学者」とかのじよ／かれらとは、いかなる関係を結ぶべきなのか。その逆に、外国に持ち場をもつ日本人学者と「国内」学界の関係は如何。学問の普通言語とともに語り合う同業者なのか。国籍を異にしたパートナーなのか。あるいは、アジアという「知的実践の場」（白永瑞）に参入する同志であるのか。

答えは、そのいずれかに排他的に取捨するものであつてはならないだろう。筆者自身は、「日本」を脱主体化し、その閉じた言説空間を外に開くことにこそ、「二十一世紀日本の東アジア研究」の意義が存すると思つているが、自他の関係を根底から問い直すに足る確たる手がかりが得られているわけではない。そもそも、自己と他者の関係とは、多層的で流動的なものである。再生産される「日本」という主体の位置を絶

えず問いかけつつ、複数的な「われわれ」を生きること。言つてみれば、サイドの提示するディアスポラの二重帰属——それは東アジアの「歴史」にかつて存在し、今も存在しているものである——の問題系を活きること、二十一世紀東アジア研究の可能性（オルターナティブ）はここにしかないと思者は思っている。

二十一世紀の日本の中国文化研究に 求められるもの

山本英史

中国の空港で出発便がちょっとでも遅れると真つ先にカウンターに駆けつけるのは日本人だと相場が決まっている。そして異口同音に尋ねることは「いつ出発できるのか」である。そんな時、中国の服務員は「不知道（知らん）」の一点張り、取り付く島もない。彼らには、何ら情報を得ていないので知らないものは知らないだし、出発できるまではどうなるものでもないのに何をそんなに焦るのかという思いもあるのだろう。だが、たいていの日本人は答えをすぐに得られないことでさらに苛立ちを増す。

ところで、かの魯迅はかつて「日本人程結論を好む民族、即ち議論を聞かうが本を読まうが、若し遂に結論を得なかつたらどうしても気がすまない民族は、今の世の中に頗る少ないらしいと云ふことである」（内山完造『生ける支那の姿』学芸書院、一九三五年、序）といい、日本人の性急な思考を皮肉つたことがある。空港の日本人の行動は、結論——ここでは「いつ出発できるのか」——を一刻も早く得たいことに由来するのは疑いない。とすれば、日本人の「結論を好む」という性格は昔からあったことがわかる。魯迅はその性格を日本人の